

『雅印を語る』

『筆の念仏』



「儀」



「硯田情農」



「松蔭佛徒」



「中尊艸堂」



「儀」

私は文房具の中で、印は特に愛玩のものですから、いつとなく蒐めたものが何百顆となったのを戦災で半ばを失い、その後またこりずに存じ上げている諸先生を煩して、筆をとれば印を撫して娛しんでおります。

「儀」丸い印面に白文のこの一字は、中国の名家でかつて日本にも来ておられた錢瘦鉄先生の作で、本郷の寄寓を訪ねて作ってもらったが側款に天璽紀功碑を仿すとあって珍玩の印材でもあったが、戦災で焼けたのを灰の中から拾ってきて愛用している。対の朱文「素」の一字印はついに見つからなかった。ともに田黄であった。

「硯田情農」 中村蘭台先生(二世・一八九二〜一九六九)の昭和十年ころの作、今でも好きで印の句を自認している。

「松蔭佛徒」 松丸東魚先生(一九〇一〜一九七五)戦後の作、小さな庭であるが少し松が茂っているので、別号みたいに愛用して措かないのである。

「中尊艸堂」 中尊寺と関係があるかのようには聞えるが、これは中村素堂の音読みのいたずら、丁齋梅舒適先生(一九一四〜)の刀。

「儀」字は前と同じであるが、山田正平先生(二八九九〜一九六二)の最晩年のもの、いつもの先生の風でないのも奇。石は田黄のしずかなもの。

『書学』、昭和四十四年十月

先ごろ名僧の墨蹟をたくさん陳列したことがあって、書の見られて、眼にも、あんなすがすがしい静かな雰囲気には初め、全く圧倒された。

古来文墨に具眼の識者や茶人たちが、墨蹟のといって、この格調を珍重する気持ちがしみじみうなづけたのであった。頂相を、目前にその師家がいますように尊重する禪門の人々は、その墨蹟に対しても、わざわざその作品をかけるだけの床を作るものさへあるほど大切にす。また禪門以外でも、その宗祖の御名や本尊のご名号などの軸を床に掲げ、そこに仏菩薩・祖師をお迎えし、これに敬意をこめてお供養している。

これは仏名を書けば、そこに何となく仏につながる思いが湧く、書く人も、見る人もそうであろう。文字は不思議なものである。

外国の字にもその例はあるというが、漢字は遠いむかし、人間の禍いとなるものを封じ、幸せを祈る呪符のような使命をもって作られ、それが進展して象形の字、会意の字その他に発達したものである。毎日字を書きつつ、その出発においては人間の切実な念願を象徴するものから始まったことを、何か有り難いものがある。

言葉で申していることに永い命を持たせるものが書であるとも思い、毎日ものを書く初めに私はまず南無阿弥陀仏と、口称するのと同じ気持ちで仮名や漢字で書き、それから何かと書き出す生活をしてかなりの年月になる。

今年の書き初めもまた念仏から書くことであろう。私は筆で造仏するように書きたいと思うけれど、その時その時の気分、よいと思うものはなかなか書けない。ただこのごろはこのようなことが楽しくてしているようで、一念一念のこもったものでなく、口ぐせの念仏のようにしていることを、省みてひそかに恥じている時もある。筆を弄ぶことのお好きな方々に、時々この筆念仏をお勧めし、これを念仏の浄業だなどと怪しげなことをいっている。

『筆間雑記』中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。